

酒井繁一／民族の苦悩 I

第1部 セントラル耕地



民族の苦悩 I

ブラジル移民30年の記録

酒井 繁 一

春秋社版



第一部
セントラル耕地

著者紹介

明治三十四年、宮崎県に生まる。早稲田大学に学び、昭和七年、一家をあげてブラジルに移住した。以来農業に従事し、傍ら移住地の文化事業に携わってきた。

昭和三十二年、第一回ブラジル「コロンビア文学賞」を受け、三十三年、移住功労者として日本外務大臣より表彰を受けた。

同年、二十五年振りに日本を訪問し、移住奨励のために全国各地を講演して回った。現在、国際移住協力会常務理事。

著書に、歌集『明日の曙光』『寒温』『朝の香』『うぶすな』、随想集に『ブラジル日記』『日本の肌』、創作集に『民族の苦惱』があり、ほかに『ブラジル案内』がある。

民族の苦惱 Aブラジル移民三十年の記録ⅤⅠ

一九六二年九月一〇日

第一刷発行

三〇〇円

著者との協定
により検印廃止

◎ 著者

酒井 繁一

発行者

神田 竜一

印刷所

安信印刷工業株式会社
東京都中央区月島通二の九

発行所

株式会社 春秋社

東京都千代田区神田宮本町一〇
電話(二五)六五七五・四七二五
振替 東京 二四八六一

N.D.C. 913 四六版 208頁

(徳住製本)

目 次

第一部 セントラル耕地

1	波状高原	八
2	冷たい昼食	一八
3	宗川の系譜	二二
4	ブラジルの鶏の声	二八
5	新鮮な日光	三一
6	水の流れ	三七
7	日本の遠さ	四一

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
耕地の明治節	血を噴きし手	君は百姓か	無言で働く	衝突	暴れ牛	法事の夜	原始林の道	仔豚と蒲団	朝の道	日本に帰りたい	もつれた夜	血縁の憎悪	大根の肌
一一五	一〇七	一〇一	九五	九一	八七	七九	七二	六七	六三	五八	五四	五〇	四六

22	愛国心の争い	一二〇
23	樹上の君子	一二七
24	各国の移民たち	一三二
25	先駆者の農場	一三八
26	不快な求婚者	一四五
27	角笛は流れる	一五四
28	火も消えて	一六二
29	渡る世間	一六九
30	争いつきず	一七八
31	野生の西瓜	一八四
32	悲しい夜食	一八九
33	暗夜の逃亡	一九三
	後 記	二〇三

民族の苦悩

——ブラジル移民三十年の記録——

第一部

セントラル 耕地

1 波状高原

二千五百町歩のセントラル耕地の中に起床の鐘が鳴っている。百十六家族の労働者を一人残らずコーヒ―園に狩り出すまでは鳴りやまない鐘である。

あたりはまだ暗い。星屑が輝いている空の下に、ブラジルでは春といわれる十月の冷たい風が吹き、大地はまだ動かない。働きに出る労働者の家へのみ薄い灯がともっている。どの家にも善揚げ井戸があつて木車のきしむ音が聞こえている。あちらでも、こちらでも、犬が吠える。鶏が鳴く。牧場から牛の声も聞こえる。

耕地は大きくうねった波状の高原で、その中に小川が流れており、川上の高地に耕主の家がある。その柵外に支配人の家と監督の家が並び、道をへだててコーヒ―精選場、倉庫、車庫等がある。一般労働者の家はそれから二百メートルも離れた小川の東側に並んでいる。住宅の外はすぐに牧場になっていて、境界には有刺鉄線が張りめぐらされている。牧場の

牛や馬が宅地に這入らないためでもあるが、勝手な通行ができないためでもある。耕主の家だけに自家発電の電灯設備があるが、支配人以下の家はカンテラをともしている。起床の鐘は支配人の家から鳴る。俊一を家長とする宗川一家の者もみな起き出している。家は板壁作りで土間、それが四部屋に区切られていて、中央の一間が食事の間でもあり、客間でもあるこの部屋の一隅に粗末な板で作った仏壇があつて、そこに先祖代々の位牌と、二児の位牌とが並んでいる。信心の深い俊一の母の三枝は毎朝欠かさずに水初穂を供え、真言經の一節を唱える。

上手から「起きろ！」という声が馬の蹄の音とともに聞こえてきた。ピストルを腰につけた監督が、馬に乗って皆を起こして回るのである。

セントラル耕地にはいまイタリア移民が三十二家族、他州から流れて来た黒人が十四家族、ブラジル人が十八家族、イスパニヤ移民と、ポルトガル移民が各十六家族、日本移民が二十家族いる。耕主はイタリア系の人で祖父が移民であつた。

日本移民はこの二、三年非常に多くなつた。勤勉

で仕事がうまくいっているので、ブラジル国民の中に人氣が沸いて、大農場主たちが望むからである。去年（一九三一年）は三万人を超えたが、本年もそれを超えるであろう。一九〇一年第一回移民が送り出されてから二十四年になるが、ようやく成果を挙げつつある。

この耕地の日本移民は、この年の二月が最初で八家族、四月に六家族、八月に六家族配耕された。日本移民の間ではこれを第一期組、第二期組、第三期組と呼んでいる。

各地、各国から来た勞務者たちは、だいたい国別に住宅を分けて住んでいる。耕主の住宅に最も近いところにイタリア移民と、日本移民を住ませ、最も端の方に他州から流れて来た黒人たちを住ませている。これは耕主の信頼の度を示すものと見られている。

宗川一家はブラジルに着いて四十日になるが、一家揃って仕事に出かけるのは今日がはじめてである。神戸を發つて二十日くらい経ち、船が印度洋を渡る頃から船内にハシカが発生して、子どもたちが次

次に病みついた。俊一には五歳、四歳、二歳の男ばかりの子があったが、ケープタウンを出て、大西洋にはいつてから揃って発病した。俊一夫婦はほとんど船尾の病室に病む子を看とり続けた。波に押し上げられて空転する推進機の音を聞きながら、終日病む子の寢床を押えていた。

サントス港に着いたとき、長男と次男とはどうか歩くまでに全快したが、三男は担架に乗せて船から降ろした。船医はすぐに入院をすすめたが、移民会社の囑託医が診察して、その必要はないと主張したので、担架のまま汽車に乗せ、むし暑い奥地に向けて一昼夜以上揺られて運んだ。

耕地の住宅は想像よりもはるかに粗末で、馬小屋のようにガランとしていた。着いて二日ほど休養日があったが、実際には休養ができるわけがなく、この二日のうちに寢台を作り、かまどを作り、生活に必要な一切の準備をせねばならなかった。何もかも日本と習慣が異なっているので、思うようにはかどらない。寢台などは耕地から二キロも離れた原始林に行つて、適当な雑木を見つて、それを適当に編ん

で作らねばならない。にわか大工の悲しきで、出来上がったものではでこぼこがひどく、ござを敷き、蒲団を重ねて寝ても体の痛い寝台であった。

その寝台の上に二人の病む子を寝かせた。一週間目に三男が死んだ。三十日後に後を追うように二男が死んだ。二人ともアミীব赤痢だった。船中で患らった麻疹のために体が弱りきっていたので、脆く死んでしまった。俊一夫婦はこの二人の子の看病で、ほとんど仕事に出なかった。そのために宗川一家の仕事は他の人に比べてひどく遅れてしまった。

コーヒーが沸くと皆が食卓を囲んだ。食卓と言ってもわずかにカンナのかかった板を棧に打ちつけたものである。この食卓の上にカンテラが据えてある。カンテラの灯は壁板のすき間から吹き込んでくる風にあふられて、ジリジリと鳴り、燃え上がった石油は煤煙を降らしている。食卓の正面には俊一の父の幸造が掛け、その片側には母の三枝をかしらに妻の由子と妹の菊子とが掛け、片側には俊一と、その弟の正人と俊一の長男俊男とが掛けている。

誰も無言である。ひっそりと静まりかえった食卓

の上には、幸造の漬物を噛む音が齒切れよく響く。幸造はすでに五十五歳で、頭髮はすこし薄くなっているが、いたって元気で、齒はまだ一本も抜けていない。短気で気の強さには人を寄せつけぬものがある。漬物を噛む齒切れの音はその気性を現わしている。三枝は五十二歳、小柄で気も小さい。短気でもある。齒が弱く十年も前から入齒をしている。俊一も短気である。病弱というほどではないが、頑丈な男でもない。子どものときから學問が好きで、本を読み過ぎて近眼になったといわれ、眼鏡をかけている。正人は案外氣長であるが、その代り怒りが爆発すると思ひ切った行動をする。小さいとき肺炎を患らって、九死に一生を得て以来、健康を回復して近頃、全く病氣を知らない。菊子は短気でない。赤ん坊のときはひどく泣き癖の強い子で、母をはじめ家人を悩ました。「この子はひどい短気者になるだろう」と皆が心配していたが、その菊子が一番氣が長く、体も丈夫でランニングの選手にもなった。由子は間伸びがしているほどの氣長者である。無口で、素直で、誠実である。俊男は由子の性格を受けて生

まれた。人になつきやすい子で誰からも可愛いがられてきた。故郷を^た発つときに「こんな可愛い子をブラジルにまでやらねばならないのか」と村の人たち^ちに惜しまれた。

一家の中の実力者が揃って短気者であるから、宗川の家にはよく波乱が起こる。三枝には多少憶病なところがあって、怒りを押えることもあるが、幸造と俊一との短気は全く野放しである。だから二人がかち合うと、どちらも譲らない。譲らないままに物別れをして、幾日もものを言わない。これが一家にどれだけ禍いするか知れない。

その日も幸造は、「食いものが悪いから体が保てぬ——」とつぶやき、顔をしかめコーヒーを飲んだ。幸造は魚が好きで、日本では朝から食っていた。

日本と、ブラジルでは食事も違う。ブラジル人の生活には味噌、醤油がない。味はたいいてい塩と脂^{あぶら}でととのえる。脂はほとんど豚の脂である。野菜、獣肉、魚肉、米、何でも脂でいためるのである。ことに有名なのは「フェジョン」という豆を脂でいためる料理である。これは日本人が味噌汁と醤油汁とを

好むほどの重要性を持ってしているもので、ブラジル人にとってはパンに次ぐ主食物である。

豚の脂の料理は豚くさい。だから豚の匂いを好まぬ者は、この料理が嫌いである。

食事の習慣は、朝はコーヒーとパンだけで、昼と夜とが主食となっているが、日本から来たばかりの移民たちは、コーヒーとパンだけの朝食では保てないので、茶づけ飯などを食っては出かける。米だけはまず不足がない。

幸造はフェジョンが嫌いでほとんど口にしない。酒が好きで晩酌なしでは過ごさないのであるが、ブラジルには甘藷^{かんしょ}で作る火酒^{ピエンガ}という日本の焼酎^{しょうちゆう}に似た飲みものがあるので、それを飲んでわずかに意を満たしている。三枝は獣肉一切が嫌いで豚の脂を使用した料理は何一つ食べない。といって魚肉や野菜が自由に手に入るわけではなく、耕主に頼んで特別に手に入れた塩鱈^{たら}を水炊き^{みずたき}にして、少しづつ刻んで菜にしている。

朝食を終えて出かける用意をしているところに、監督が「宗川！」とせき立てに來た。皆は立ち上が

った。

「誰も忘れものはないかい？」

三枝が皆を振り返って言った。

幸造は自分の鍬だけを担いで先に出て行った。地を蹴るような足どりである。

正人は水槽の把手に鍬の柄を通して担いだ。一家七人の者が終日飲む水であるから、かなり重い。旧移民たちはこの飲料水を運ぶために「猫車」という一輪車を作っている。木の車で、油がきれるとギイギイ鳴って騒がしいが、どんな細い道でも押して行ける便利な手押し車である。これを大型に作って、弁当や農具まで積んで行く者もある。今その猫車のきしむ音が、あち、こちに起こっている。新移民には、この猫車さえ羨望される。

菊子と由子とは昼の弁当を分けて担いだ。三枝は俊男の手を引いている。俊男ははじめてコーヒー園に行くのである。俊一は裏口の戸を締めて鍵をかけ、母の鍬と自分の鍬とを担ぎ、片手に鍬を研ぐヤスリを握った。常夏といわれるブラジルにはさして氣候の変化はないが、十月の朝は寒い。

起床の鐘はまだ鳴っている。

有刺鉄線の張ってある牧場には、二、三カ所に出入口があって、頑丈な木で作られた扉がある。扉は開閉のたびに重くきしむ。仕事場であるコーヒー園までは、牧場の細道を四キロも歩いて行かなければならない。皆は、薄暗い細い道を一列になって歩いて行く。前にも後ろにも、同じ仕事場に急ぐ幾群かがいる。俊一たちの前には、黒人たちがカン高い声で話しながら行く。黒人たちは背が高く巨木を思わせるものがある。小柄揃いの宗川一家の者は従者のようなひけ目を感じて、黒人たちの後ろについていた。仕事場に急いでいるのだから、みな足が速い。大人の中に一人だけ混じっている俊男は小走りに走っている。日本人のなかには子どもたちの声が聞こえる。子どもまで連れて農場に行くのは日本人だけである。他の国の労働者の家庭では、主婦が仕事に出かけることはほとんどない。炊事と洗濯、それは一家で誰かがしなければならぬ仕事である。雇主はそれを理解している。主婦か、他の女の一人は、皆が仕事に出た後に残って洗濯を済まし、炊事をする。

そして昼の弁当を作って仕事場に運び、それを皆が食べてしまえば空殻あきがらを持って帰って夕食の支度にかかる。これが他の国の労働者の習慣である。が、日本の移民は一家みな家を出て働く。労働力のすべてを畠にそそぎ、金にしたいからである。こうした日本の移民たちが、鷹揚たうやうな他国の移民に混じって、夜明けの牧場の中を通っているのである。

牧場には目ざめた牛が群をなして歩いている。中には道の真中に寝込んで動かないのもいる。こんな時は、こちらから避けて通らなければならない。初めて牛の傍かたわらを通る俊男はもちろん、俊一も由子も牛にはまだ慣れていない。他の者たちが平気で通るのは四十日間の往復で慣れたのであろう。

あたりは白んできた。牧場には新鮮な若草が露を受けて光っている。東には暁の雲が美しく空と地に溶け合ってひろがっている。目を遮る山もない。宗川一家が働くクーヒー園はその中にある。遠くで鳴く鶏の声がすがすがしい。

牧場には白蟻しらぎの塔が立っている。蟻はブラジルの名物の一つである。「塔」は円錐形で、高いのは二

メートルにも余り、直径は一・五メートルほどもある。土を固めて作っているのであるが、その固さは鶴嘴くさねで壊しても壊しかねる。内部には、蜂はちの巣に似た段層があり、そこに一群の根拠がある。白蟻は木の根や蒔まいた穀物などにつく。米を蒔けば米を、野菜を蒔けば野菜の種子を侵食するので、白蟻がいる所には作付けができない。この白蟻を駆除するには塔の一カ所を穿うがち、段層に火をつける。火はじりじり燃えてついに土で固めた外側だけを残して燃えつくす。白蟻の絶えた塔には雨除けになるほどの空洞ができる。

俊一は白蟻の塔を数えてみた。高さ五十センチぐらいのものから、二メートルに余るものまで、三十を数えたが目のとどかぬ所にもまだあるようだ。

「俊男、あれは白蟻の塔だよ。あんなもの日本にはないのだよ」

俊男は珍しく蟻の塔を眺めた。

朝の鐘は鳴りやんだ。どの家の者も残らず狩り出されたのであろう。

足許もとに道を横切って、木の葉を運んでいる蟻の一

群がいる。これは赤蟻だ。体が大きい。特に頭が大きいので「巨頭蟻」といわれている。頭に体の二、三倍ほどもある木の葉や草の葉を担いで巢に運ぶ。

野菜や、果樹の新芽などを好むので、これが繁殖している所は何を植えても育たない。白蟻は地面に塔を作ってその根拠を示しているが、赤蟻は地下に巢を持ち、しかもその巢を巧妙に晦まして、巢から四、五百メートルも離れたところから獲物を運ぶ。大群になると何百万匹であらう。活動も昼を避けて夜間に行なう。夕方まで若葉に蔽われていた立木が、翌朝裸にされていることも珍しくない。夜、この一群が立木を襲うて、青葉を切り落とす様は壯観ともいえる。樹上に登った一部隊があって、これが一葉一葉を片っ端から食い切って落とす。そこには蚕が桑の葉を噛む時のような音がたつ。下には主動部隊が待ち受けていて、えっさ、えっさとこれを運ぶ。運ぶものと引返すものとが織り合っている。夜が明けると活動を止めて引揚げることが、昼になっても運んでいる落伍者もいる。

赤蟻の被害は大きい。「ブラジルが蟻を倒すか、

蟻がブラジルを倒すか」とまで言われている。政府もこの蟻の駆除にはやっきとなっているが、なかなか成果はあがらない。作り荒らした土地や、牧場にはこの蟻が特に多い。牧場になると駆除がなかなかむずかしいので、「牧場があるあいだ蟻は亡びない」という説もある。

白蟻も赤蟻もフェジヨンや、コーヒーにはあまり近よらない。それは、これらの落葉はすぐに醗酵し、蟻が好まないからだという説もある。

宗川一家は、白蟻と赤蟻の巢窟と言われるこのセントラル耕地に配耕されたのである。だから米も野菜も作れない。蔦くものはフェジヨンばかりである。農場の固定賃金は一般の賃金に比べて極めて低い。これを補うために耕主はコーヒー園に「間作」を許し、間作の収入はすべて労務者に与える。それによって労務者は収入の増加をはかるのであるから、蟻がついて間作のできない耕地に配耕された者は取り返しのつかない不運を見るわけである。

今のコーヒー園の仕事は除草である。日本では見たこともない二メートルに近い柄をつけた鋏を、中